# 紙の素材感や特性が導き出す視覚表現の可能性

## —紙鳥による音の舞—

**石井 美智**　Ishii Michi

紙の持つ質感や触覚、特性などを再認識し、「紙の音」「音の振動」「鳥」というキーワードから、紙によって作られた鳥（紙鳥）の群れが、音の振動によって羽ばたくことで、紙の音を見る作品を制作。視覚から感じられる生命感とそこに生み出される音のクロスオーバーによって、紙鳥を観る鑑賞者に、触覚や視覚、聴覚の垣根を超えた新たなコミュニケーションの可能性を体現させることを狙いとする。

紙による作品の背景は中学校２年生の美術の時間、紙のランプシェードを作ったのが始まりである。卒業間際まで校内に展示されていたことから、声をかけられ人との繋がりを得られたことにも面白さを感じ、作品を観る人の心を動かせるものを作りたいと思うようになった。

高校では金属工芸コースを専攻し、主に秋田の伝統工芸である銀線細工に力を入れた。卒業制作では伊藤若冲の雄鶏をもとに、銀線細工を使用した半立体の雄鶏を制作。鳥のもつ羽根の繊細さと銀線細工の螺旋の美しさに魅了されたが、銀という素材が高価なものであり、自主制作で続けるには難しいと考えるようになる。大学進学後、ある日の課題制作中に入院することになり、病室という制限された環境下での作品制作を余儀なくされた経験から、紙でできることを再認識し、また、作品を観た人の繋がりが薄暗い病室という空間を明るくしたことから、紙での制作を続行するに至った。

身近に存在する安易で安価な素材でできることの可能性や、現代では紙幣さえもデジタル化され、紙という素材を必要としない傾向にあるが、紙の魅力を再認識することで新たな表現やコミュニケーションの可能性を示唆する面白さや、紙という安価で手に入りやすい素材でも、生命感あるものを表現できるということを伝えたい。

また、「美術の世界はよく分からない」「専門ではないから」「何が面白いのか」「美術は必要なのか」など美術というだけで理解に苦しんでいる人を見かける。現に、教育の場でも美術の必要性は軽視され、授業時間数も中学校と高校では選択教科ともなり減少傾向にある。実際、美術の認識は「勉強しなくてもいいもの」とも言われている（アルバイト先の塾生の声）。

しかし、自主制作はもとより、人との関わり、社会との関わりを兼ねた美術には、どの教科より広く浅く、また深く知ることができなければ成り立たないものであると複合芸術研究科を通して実感した。表現に至るまでのアイデアや想像力、発見力には、幅広い教養と確かな学力が必要であると考える。紙で作られた鳥たちが、ただの紙も見方次第で変貌するということや、凝り固まった固定概念から脱却することで得られる、新たな気づきは、目まぐるしく過ぎ去っていく現代社会の中で生きている私たちに、初心に帰るような気持ちや、大切なことに気がつかせるものでありたいと願う。

1995 年秋田県生まれ。2018 年秋田公立美術大学コミュニケーションデザイン専攻卒業。秋田公立美術大学附属高等学院では金属工芸科を卒業。高等学院からの９年間、秋田市新屋の地で美術、工芸、デザインを幅広く学んだ。素材の表現の可能性の模索から、「紙」「鳥」「音」をテーマに紙の可能性を研究してきた。

「「紙鳥」による音の舞」
2020 年
立体作品、空間表現
薄用紙（花紙）、アルミ板、振動機
H300 × W600 × D600mm